

東京大学キャンパス計画大綱

平成26年3月27日

(役員会議決)

前文

東京大学は、教育・研究に係る構想を、キャンパスという有限の空間の中で総合的かつ戦略的に実現させるための基本理念および指針として、東京大学キャンパス計画大綱をここに定める。

キャンパス計画においては、教育・研究環境の改善・向上、歴史的景観との調和、災害への備え、構成員の福利と快適な環境の確保、周辺地域との協調と連携に意を用いつつ、多様な人と学術が相互に交流し、新たな科学・技術が発展する場であるキャンパスのあり方を見据え、全体の総合性・統合性を保ちつつ計画し、その実現を図る。

東京大学のキャンパスは、学問の府としての教育・研究の理念と精神を養う土壌であり、大学の魅力と独自性をもっとも直截に表現し、構成員および第三者に伝える媒体である。建築群、道、広場、緑地等からなるキャンパス空間は、すべての学生・教職員にその価値が等しく開かれるとともに、前記土壌として十分ふさわしい質を備えるよう計画され、整備されることが重要である。

東京大学の保有する施設・敷地等は、現在それを利用する各組織が固定的に専有する権利を保持するものではなく、科学・技術の発展および社会情勢の変化に即応しつつ、社会から付与された資産を有効かつ効率的に活用する視点から、利用のあり方を柔軟に変更・再編することが求められる。そのため、施設・敷地等の更新および用途変更のための仕組みとそれに要する十分な敷地を確保し、教育・研究環境の変化と新規の需要に備えることが肝要である。

東京大学は、本郷・駒場・柏の3極を中核としたキャンパス構成を基軸としつつ、そこに連なる白金台・目白台を含む多種・多様な施設・敷地等によって総合的に構成される。東京大学のキャンパス整備にあたっては、本大綱の定める理念およびそれに基づく要綱等の規定を十分に尊重し、キャンパス計画の全体と整合するよう歴史的環境の継承と世界最高水準の教育研究を展開できる基盤の整備を推進して行く。

第 I 章 キャンパス計画の全体構想

1. キャンパスの基幹構造 - 3 極構造

(1) 3 極構造

大学キャンパスは、本来、学問体系に基づく教育・研究組織の構成に対応するものとして構想されなければならない。東京大学の現有キャンパスも、基本的には、長年にわたる学問の発展、教育・研究活動の展開を反映しつつ現在に至ったものである。なかでも、本郷地区キャンパスと駒場地区キャンパスは、その長い歴史を通じて、東京大学における教育・研究の中心基地であり続けてきた。両キャンパスは、東京大学にとって本質的な存在であり、存立に不可欠な要素である。

平成4年より、これら2キャンパスに柏地区キャンパスを加えた3キャンパスを中核とする3極構造を本学のキャンパス計画の基幹構造として位置づけ、キャンパスの計画・整備を行ってきた。この3極構造は、教育・研究の将来構想のキャンパス面への投影であると同時に、各キャンパスの特性に配慮したバランスの良い地理的機能分散と、教育・研究活動相互の有機的連関の確保、並びに福利・課外活動の充実とを企図するものである。

(2) 本郷地区キャンパス

3極のうち本郷地区キャンパスは、教養学部を除く全学部および多くの研究科・研究所群ならびに附属病院を擁する3極構造の最重要拠点である。同キャンパスは、3極構造のなかでも特に専門教育（後期課程教育および大学院）に関わる機能を重点的に担うキャンパスとして、大学が培ってきた歴史・伝統への矜持と未来への責務を伝えていかなければならない。

本郷地区キャンパスは、近代的総合大学として国内でもっとも長い歴史を有し、かつ、近代日本国家の発展に貢献してきた本学のみが有する、歴史的風格に富む固有の空間構造と景観を有する。国内はもとより海外においても、この点において比肩し得る対象は少ない。同キャンパスの景観は、未来へと譲り伝えるべき日本の財産とさえ言うことができる。本学はこれが全学共通の財産であることを認識した上で、将来へ向けたマスタープランを構築する。

このため、東京大学のアイデンティティの象徴および基盤として、本郷地区キャンパスの歴史的空間構造及び景観（建築群および外部空間）の価値を将来にわたって継承することをキャンパス計画の第一義的な目標とする。そのうえで、知の最先端を担い、時代の要請に応じた学問の責務を果たすために必要な施設等の機能の更新（増改築および新築等）は、積極的かつ継続的に実現されなければならない。その際、各部局の教育・研究活動を展開する施設計画の趣旨を尊重しつつ、常に全学的視点から、地区全体としての理念の一貫性を保持した計画・整備を行う。

(3) 駒場地区キャンパス

一方の重要拠点である駒場地区キャンパスは、地域との交流・連携を意識しつつ、社会に「開かれた大学」の理念を具現する教育・研究の場である。具体的には、前期課程教育組織、総合文化の教育・研究組織、および世界の最先端研究を展開するイノベーション推進組織等を併置し、知の広がりや深まりを担う組織相互間の知的協働および社会との多様な交流・連携を通じて、前期課程教育の新たな展開と、多様な人材の育成、研究の深化及び知のネットワークの高度化を図る。さらに、世界トップレベルの外国人研究者の受け入れ・活用を促進し、国際化に対応し得る人材の育成を図る基盤を整備する。

駒場地区キャンパスは、駒場Ⅰ、駒場Ⅱ、駒場Ⅲの3キャンパスから構成される。同キャンパスは、豊かな自然資源に恵まれているにとどまらず、新たな都市の中心の一つとして大規模再開発が進む渋谷に隣接しており、高い将来性を有する。こうした地理的特性を最大限に活用しつつ、自然豊かな都市型キャンパスへの移行を進める。

駒場Ⅰキャンパスは、教養学部が果たしてきた前期課程教育の長い伝統と、それに深く関わる総合文化領域における高度な教育・研究の実績を持つ重要拠点である。同キャンパスは、国際社会を見据えた学問と社会との交流・連携を図るとともに、総合文化研究科の学際性を活かしつつ、数理科学研究科や隣接する駒場Ⅱキャンパスに配置された多様な研究組織との知的交流を通じて、独自性のある学問の展開する場を醸成する。これに対応し、市民教育、民間との共同研究、国際交流等の多様な情報発信の機構を設け、「開かれた大学」の理念を具現する空間を構築する。

駒場Ⅱキャンパスは、関東大震災後に航空研究所がこの地に配置換えされて以来、特色ある研究活動が展開されてきた。その歴史を踏まえ、同キャンパスの各研究組織は、世界最先端の研究拠点を構築すべく、知的集積の高度化と多様な人材の育成を推進するとともに、海外研究機関や産業界との連携ラボ等の積極的整備を通じて、知のネットワークのハブおよびイノベーション推進拠点としての機能を強化しつつあり、こうした特性に応じたキャンパス空間の構築・整備を推進する。

駒場Ⅲキャンパスは、駒場Ⅰキャンパスおよび駒場Ⅱキャンパスにおける国際化の推進を支える学住近接の生活拠点であり、海外からの研究者、学生の生活基盤としての充実を進める。

上記のような構想の効果的実現のため、各部局の教育・研究活動を展開する施設計画の趣旨を尊重しつつ、常に全学的な視点から、駒場地区全体としての理念の一貫性を保持した計画・整備を行う。

(4) 柏地区キャンパス

もう一つの重要拠点である柏地区キャンパスは、近年の学問の急速な発展および社会状

況の激変に対応する教育・研究の新たな展開の場であり、伝統的な学問体系および組織には納まりきらない基礎的課題群について、新たな学問領域の創造を通じて教育し、研究する基盤を整備する。

柏地区キャンパスは、柏、柏Ⅱの2キャンパスとこれらと連携する柏の葉駅前のサテライト・キャンパスから構成される。同地区キャンパスは、学融合と社会連携の実験場であり、未知の分野へと分け入る知的冒険の場である。東京郊外の豊かな敷地を活用し、国際連携の拠点となることを目指す。

柏キャンパスは、柏地区キャンパスにおける教育・研究の中核である。学融合という知的冒険と新たな学問フロンティアの創成を推進するために必要であるとともに、国際的研究拠点にふさわしい機能を備えたキャンパス空間の構築・整備を推進する。

柏Ⅱキャンパスは、現在、柏キャンパスにおける学生および研究者の日常の活動を支える運動・リフレッシュの場および学住近接の国際的生活拠点である。国際連携の一層の促進に向けた生活基盤の充実を図るため、日常生活を支えるアメニティ・利便性の向上を図る。また、サマースクール等の滞在型・短期集中型学習行事を可能とする学習環境を確保するなど、教育・研究活動の広がりを可能にする空間を構築・整備を推進する。

柏の葉駅前のサテライト・キャンパスは、交通アクセスがよく、柏地区キャンパスの顔となる駅前の立地を最大限に活用した社会連携の拠点である。周辺施設と協働して都市環境の魅力向上に寄与するとともに、オープンイノベーションの拠点にふさわしい機能・空間を構築する。

上記のような構想の効果的実現のため、各部局の教育・研究活動を展開する施設計画の趣旨を尊重しつつ、常に全学的な視点から、柏地区キャンパス全体としての理念の一貫性を保持した計画・整備を行う。

2. 3極に連なる固有のキャンパス

(1) 3極に連なる固有のキャンパス

東京大学は、3極構造を全キャンパスの基幹構造としつつ、教育・研究施設を促進し、構成員の福利を充実するために、各キャンパスの土地利用と施設整備を図っている。その中で、3極で構成される基幹構造に連なり、固有の機能を持つキャンパスのうち全学共通施設を含む主立ったものについて、以下にその計画の理念および指針を示す。

(2) 白金台キャンパス

白金台キャンパスは、明治期から永きにわたり生命科学の研究拠点として活動し、現在、附属病院を持つ我が国最大規模の生命科学の研究所である医科学研究所を配置するとともに、本学が世界各国から受け入れている留学生や研究者に必要な生活環境を提供するインターナショナル・ロッジを配置している。

白金台キャンパス正面には、本郷、駒場に肩を並べる歴史的建造物を配しており、この歴史的空間構造及び景観の価値を将来にわたって継承する。

同時に、医科学研究所における医科学分野の研究を学際的・国際的に推進する本研究所の使命を果たすため、医科学分野のグローバル活動のハブ機能を担う研究拠点の形成を目指す。

また、白金台という地の利を生かし、国際化の進展に対応した環境の充実を図るため、インターナショナル・ロッジを含め居住環境の改善や福利機能の充実を進める。

(3) 目白台キャンパス

かつて医学部附属病院分院が位置していた目白台キャンパスは、現在、東京大学が国際的な教育・研究プロジェクトを支え、世界に広がる研究者や学生の核となる、グローバル・キャンパスの形成を進めるうえでの最重要拠点の一つである。世界各国の優秀な学生、研究者を惹きつける生活環境の整備とともに、多様な人材と生活を共にすることでグローバル人材育成を推進するため、居住環境、学習環境および交流環境等を兼ね備えた教育・研究施設の整備を進める。

社会にも開かれた環境を目指し、居住者の多様性の確保及び交流の機会の拡大ならびに人的ネットワークの強化を図るため、居住者間や周辺地域との多様な文化交流による教育効果を強く意識した環境整備を推進する。

第Ⅱ章 キャンパス計画の実現

1. キャンパス計画の体系

(1) キャンパス計画要綱の策定

本大綱の定める理念および指針を踏まえ、3極構造を形成する本郷地区、駒場地区、柏地区キャンパスについて、キャンパス全体を総合的かつ戦略的に再開発し、学問の質的・量的発展に対応した教育・研究活動の展開を可能にする良好な環境を創出するためのマスタープランとして、各キャンパスの計画要綱を定める。

その他のキャンパスにおいても、同様の視点から、必要に応じてキャンパス計画要綱を定めるものとする。

(2) キャンパス整備計画概要の策定

本大綱の定める理念および指針ならびにキャンパス計画要綱に定める基本計画を踏まえ、3極構造を形成する本郷地区、駒場地区、柏地区キャンパスについて、各部局の教育・研究活動を展開する施設計画全体を総合的に整理・統合し、キャンパス計画要綱に示された基本計画を実行に移すためのより具体的な計画の主立ったものを、各キャンパスの整備計画概要として定める。

その他のキャンパスにおいても、同様の視点から、必要に応じてキャンパスの整備計画概要を定めるものとする。

2. キャンパス計画の運用

(1) キャンパス計画要綱運用指針の策定

上記の各キャンパス計画要綱に示された基本計画を確実に実現するために、すべての計画要綱に共通するその運用指針を定める。運用指針には、施設等の構想および計画・設計ならびにその施工の各段階において適切な確認・審議を受けるための手順および関連する事項を定める。

(2) キャンパス計画要綱運用指針の準用

キャンパス計画要綱運用指針に定められた計画実施に関する手順および関連する事項は、計画要綱のないキャンパスについても、これを準用する。